



Title	カラフトのウイльта族の英雄物語とその伝来
Author(s)	池上, 二良
Citation	ツングース言語文化論集, 58, 253-258 佐藤チヨ演唱; 池上二良採録・解説; 山田祥子編訳; E. ビビコワ露訳; 津曲敏郎監修・序, ツングース言語文化論集シーゲーニ物語テキスト: ウイльта長編英雄物語ニグマー = « »: 北海道大学文学研究科, 2014, 258p, (ツングース言語文化論集 = , 58).
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56224
Type	report
File Information	30ikegami.pdf



[Instructions for use](#)

カラフトのウイльта族の英雄物語とその伝来

池上 二良

広義のツングース族の一派であるカラフトのウイльта族（オロッコ族）の口頭文芸のジャンルの一つに、ニグマー（*nigmaa*）というものがある。これは、一種の語り物で、内容の上からひとことで言えば、英雄物語である。

ある民族の口頭文芸の分類は、かれら自身が名づける分類名称があれば、まずそれにもとづいてなされるべきであろう。ツングース諸族の口頭文芸の分類についても、同じことが言えよう。ウイльта族の口頭文芸のうち、テールグ（*tæaluŋu*）というのは、昔話、伝説の類で、かれら自身はこれを実話と考えている。またサフリ（*saxuri*）というのは、おとぎ話の類で、ウイльта人はこれをつくり話、フィクションと考えている。これに対してハーガ（*xæəgə*）は即興歌で、ある旋律をもつてうたわれ、この点で上の二つと異なる。ウイльтаの歌謡の旋律・韻律については池上・谷本（1974）を参照されたい。このほかガヤウ（*gajau*）、すなわち、なぞなぞがあり、これも発音があるリズムをもつとみることができよう。一方、ニグマーは、語りの部分以外はふしをつけてうたわれるが、上記の歌と異なり、叙事的である。

ニグマーでは、語りの部分とうたう部分が交互に連続し、語りの部分はウイльта語で語られるが、うたう部分は、おなじツングース語に属するキーリン語（エウエンキー語）でうたわれる。後者の部分では、物語の登場人物が第一人称で述べ、各登場人物に特有の折返し句（*refrain*）がこの部分の前後につく。ニグマーの聞き手は、きれめきれめに *gəə* という合いの手を入れる（そうすることを *dari-* [動詞語幹]（合いづちを打つ）ということばで表す）。内容的にみると、筆者がきくことのできたニグマーの篇では、主人公が親子2代（*dəə dala*）にわたり、これは二段物とよべようが、さらに代を重ねるものもあるという。ニグマーは、一篇の長さもかなり長く、見方によってはウイльта口頭文芸中最たるものと言えよう。

筆者は、ウイльта族出身で北海道に住んでおられる佐藤チヨ（*Napka*）さんの語るのをきくことができた。佐藤さんはウイльтаの口頭文芸のすぐれた保持者で、上述のテールグやサフリなどを何篇もおぼえていてきかせてもらったが、さらにニグマーも演ずることができ、シーグーニ（*Siiŋuuni*）を主人公とするものとアグジナーシ・オモシナイ（*Agjinaasi Ōmesinai*）を主人公とするものの二篇をきくことができた。佐藤さんの口述した口頭文芸の諸篇は、ほかの口述者のものとともに、池上 [採録・訳注]（1984）におさめられている。ニグマーは昭和32年に録音した「シーグーニ物語」のはじめの部分がのっている。

ウイльтаの人々のなかには、ニグマーを演ずる人は何人もいて、その語り方には上手へたがあり、そのうたう声（*əəwurə*）にはよいわろいがあったという。Paasa は非常に上手、Suudəri Miitəri も上手、Wassuuka も直接きいたことはなかったが上手といわれていたとい

う。Otopči もニグマーを語ったがあまり上手ではなかったという。女の Næksinnø も、声がよく、上手で、女だけにきかせたという。なお、女がニグマーを語ると不幸になるともいうようである。

佐藤さんは、ニグマーの箇所箇所が折りにふれてよく頭に浮ぶようであり、ウイльтаとしてのかの女にとっては、ニグマーが文芸的な素養となっていると言えるように思われる。佐藤さんは、幼くしてすでに才女であったようで、十代前半のころにニグマーに強く魅せられ、冬の間、近所に住む Lojingeenu という老人のところに夜通っては、ニグマーを語ってもらい、それをおぼえたという。家人の寝しずまったかれの円錐形小屋 (aundau) の暗いなかで、たき火のあかりは、そのはたで演ずるおじいさんのニグマーをひとことも開きもらさじと聞き入っている幼い少女の顔を映し出していたことであろう。かの女は、おじいさんに気をくばって、わが家から祖母の刻みたばこをこっそりもち出してはあげたといく。うちでは、おばあさんのたばこがなくなるのが不思議でならなかったようであるが、あとでわかって家族の笑いの種となったという。

筆者が佐藤さんからニグマーをきかせてもらって最初に書きとったのは昭和 26 年ごろであったと思う。以来すべてウイльта語で話してもらって書きとったり、またニグマーの本来の語り方によってウイльта語とエウエンキー語で書きとることもおこなったが、いずれもはじめの部分だけでおわった。その後、磁気録音器が市販されて利用できるようになり、わたくしもウイльта語調査に使うようになった。これまで佐藤さんが語るのを直接書きとったテールグ、サフリなどを改めてまた語ってもらって録音し、その録音から新しくテキストを書きとった。ニグマーも録音をはじめた。昭和 32 年には、亡くなった中川カヨさんに聞き手になって合いの手を入れてもらい、2 回おこなったが、2 回とも 30 分か 1 時間ほどであいにく録音器が故障し、残念ながら中止した。「シーグーニ物語」と「アグジナーシ・オモシナイ物語」の全曲を録音できたのは、ずっとのちになって昭和 52 年の文部省科学研究費補助金を受けた調査においてであった。この録音の際には、録音器操作などに津曲敏郎君も協力してくれた。二篇の物語のうち、前者の方が長く、そのときの録音では約 4 時間 40 分、後者は 3 時間 10 分である。

元来、ウイльтаのニグマーは、キーリン人すなわちエウエンキー人から伝わったものであることは想像にかたくない。上に述べたように、その語りの部分はウイльта語であるが、うたいの部分はエウエンキー語である。ウイльта人にとっては、ニグマーは、いわば上方方言による義太夫節を坂東方言を話す人が習って語るようなものと言えよう。

エウエンキー人の中には英雄物語が広く伝承されている。英雄物語をふくめ、エウエンキー人の口頭文芸については、豊富な資料を提供したワシレーヴィチがくわしい解説を与えている (Василевич, 1936, 1966, Романова, Мырсева, 1971)。ヴォスコボイニコフ (Воскбойников, 1960) の著書も有益である。ワシレーヴィチによれば、スタノヴォイ地方のアルダン川、ウチュル川のエウエンキー人の英雄物語とウチュル川上流、アムール川、サハリン (カラフト) のエウエンキー人のものとは、語り方が異なり、また前者はヤクト語とその英雄叙事詩オロンホの強い影響を受けた点で後者と異なるという (Романова,

Мыреева, 1971, стр. 4. なお 99 ページ以下の英雄物語は精細に採録している)。

それでは、ウイルタのニグマーにくらべて、エウエンキー人の英雄物語はどんなものであろうか、それを自分の耳できいてみたいものと筆者はかねがね思っていたが、1979 年第 14 回太平洋学術会議が開催されたハバーロフスクに行ったおりに、思いがけなくもそれをきく機会にめぐまれたのである。学会開催中のある晩、アムール川流域少数民族の音楽舞踊会が催され、会場でわたくしの近くの席についたものしずかな老婦人を、ウラジオストーク遠東科学センターでギリヤク語を研究するギリヤク婦人オタイナ (Галина Александровна Отаина) さんから紹介された。その老婦人は、アムール川河口の近いマゴの学校でのオタイナさんの恩師のアファナーシエヴァ (Антонина Васильевна Афанасьева) さんという方で、サハリンのエウエンキー人とのことであつた。数日したある晩、アファナーシエヴァさんが食事に招いて下さり、オタイナさんに案内され、市の中央から遠くない団地のアパートのお宅を訪問した。かの女は、いつもは、結婚した娘さんがいる北サハリンのオハで暮すが、夏の間だけはハバーロフスクですごされるよしだつた。エウエンキー人のなぞなぞを聞かせてもらったあと、もしやと思ひながらエウエンキーの英雄物語もできるかどうかおたずねすると、できるとのこと、早速ウムスニンジャ (Умуснинде) を主人公とする一篇のはじめの部分の演じて下さり、手帖にも書いてくれた。かの女の演ずるものは、勿論すべてエウエンキー語であるが、ウイルタのニグマーと同様にやはり語りの部分とうたう部分からなり、ウイルタのニグマーのうたい方はまさにこの英雄物語のものである。さらに、うたう部分でかかれるウムスニンジャの折返し句 *niki niki mō* は、ウイルタの「シーグーニ物語」に登場するシーグーニの弟のギーワーニ (Ōiwæni) の折返し句としてあらわれるものと同じと言えよう。また Умуснинде の人名は、ウイルタの「アグジナーシ・オモシナイ物語」の主人公のその名前 *Өмөсінәй* と語幹が本来同じものではないだろうか。

ウイルタのニグマーは、このエウエンキー人の英雄物語をとり入れ、そのうたう部分は、エウエンキー語をそのままとし、語りの部分をウイルタ語にかえたものであることは論をまたないだろう。しかし内容はもとのままか、あるいは改変、新增の箇所があるかは今後調べてみなければならない。

なお、ワシレーヴィチのエウエンキー・フォークロア資料集 (Василевич, 1936, стр. 115-117) にも Умуснинда の物語の原文とロシア語訳がのっている。しかし、これをよんだだけでは、エウエンキー人の英雄物語がどんな風に演ぜられるか、またウイルタのニグマーとくらべてどうかを想像することはむずかしかつた。同氏は大体、各英雄物語の概略の原文を提示しているようである。帰国して見直して驚いたことだが、このテキストの提供者は Sahalin の A. Afanasjew である。ハバーロフスクのアファナーシエヴァさんからは、ワシレーヴィチのことは聞かなかつたが、同一人であつたのだろうか。

アファナーシエヴァさんは、実はブレーヤ川岸 (上ブレーヤ区 Чекунда 町) で 1914 年に生れ、翌 1915 年にサハリン北部 (ルイブノフスク区) に移つたのだという。このことを聞いてわたくしは、シロコゴロフの著書「北方ツングースの社会構成」 (Shirokogoroff,

1933, p.81, 川久保・田中訳, 1941, 148 ページ) に、近年ブレーヤ川のツングース人 (エウエンキー人) がサハリンへ移ったことが簡単に記されていたのを思い出し、このことを口にする、かの女はシロコゴーフを知っているという。かの女の姉がウラジオストークのシロコゴーフのところで手伝いをしていたので、かの女も小さいときに会ったということのようであった。その晩は、この思いがけない話にさらに話がはずんだのであった。

さて、ウイлтаのニグマーは、どこのエウエンキー人から入ったか、そして直接か、あるいは他のツングース人を經由してか、また、いつごろウイлтаに伝来したものか。これらの点については、アムール川・シホタアリン地方のツングース諸族にも英雄物語の伝承があれば、その発生・伝播についてくわしく調べたあとでないと正確なことは言えないが、ウイлтаのニグマーがカラフトのエウエンキー人から伝わったことも十分に考えられるところである。アムール川下流のオルチャ族にも、スモリヤーク (Смоляк, 1966, стр.134) によれば、その口頭文芸に **нингма** とよぶものがあるが、これは鳥やけもののお話で、英雄物語ではないようである。

上の問題は、エウエンキー人がいつカラフトへ移住したかの問題ともかかわる。

日本の江戸時代の間宮林蔵は、文化5年(1808年)のカラフト調査に関する報告書の「キーレン人物大概の様子」の条に、「キーレンと申す人物はサハリン川辺又はマンゴーフ川の東北余程奥山に住居候者」と述べてキーレンは大陸にいるとし、先年カラフトに渡来したものは西海岸に一・二年いたが、殺されて当時はひとりもいなかったと記している(高倉, 1982, 153-154 ページにも載る)。1854年から1856年にかけてアムール地方・カラフトを調査したロシアのシュレンク (Schrenck, 1881, S.34, 35, および民族分布付図) の記述でも、キーレンの居住分布はカラフトにおよんでいない。

パトカーノフ (Патканов, 1912, стр.88) によれば、カラフトへは、エウエンキー人が1860年代に当時の沿海州ウダ管区すなわちカラフトに近接する大陸部から、天然痘の流行を避けて、移住したという。そして1897年に143人をおぞえた。今世紀10年代にエウエンキー人を調査したシロコゴーフも、カラフトにエウエンキー人が分布することを著書のなかの分布図に記している。シロコゴーフは、古くから今日までのエウエンキー人の南方への移動のうち、カラフトへのエウエンキー人の移動をもっとも新しい第4波に属すとしている (Shirokogoroff, 1933, p.164, 川久保・田中訳, 1941, 317 ページ)。

このように、カラフトへのエウエンキー人の移動は、ほぼ1860年代以後くらいのことのように見える。すると、ウイлта人のニグマーも、カラフトのエウエンキー人から入ったものであれば、それ以後の比較的新しいもので、それがウイлта人の間に流行したのであろうか。

それでは、さらにウイлтаのニグマーとなったエウエンキーの英雄物語は、元来どこのエウエンキー人のものだったろうか。それにはニグマーのエウエンキー語がどこの方言であるかを調べることも重要なかぎとなるだろう。たとえば、ニグマーのエウエンキー語の10代の数詞は、数詞10が「から」の意味の格語尾 **-duk** をともない、そのあとにひとけたの数詞が来る構造をもち、13は **jānduk ilān**、19は **jānduk jəgin** である (jānが10, ilānが

3, jəgin が9である)。数詞のこの構造は、ワシレーヴィチの辞典(Василевич, 1958, стр.693)をみると、イリンペア方言やウチュル・ゼーヤ方言にある。

また、もしウイルタのニグマーがカラフトのエウエンキー人から入ったものであれば、その問題は、カラフトのエウエンキー人がどんな経路をたどってどこから来たかの問題と関連する。パトカーノフによれば、上述のように、かつてのウダ管区から来たというが、そのどこから来たかは不明である。一部はブレーヤ川地方から来たことは、アフナーシエヴァさんの例(および上述のシロコゴロフの記述)から知られる。

カルゲルの調査報告(Каргер, 1929, 富田訳, 1944)には、ブレーヤ川のエウエンキー人がアムグン川を下って移動したが、先発のものがアムグン川の途中で上陸したのに、後続の舟は連絡が間違っアムール川を下り、リヤングル島に至ったことが記されている。アムール川下流地方の左岸支流のウルミ川などやその西のブレーヤ川地方、あるいはひょっとするとさらに西方ないし西北方のエウエンキー人がアムール川やアムグン川を経て、海峡を渡ってカラフトまで移動したことはありえよう。

上に述べてきたように、エウエンキー人の英雄物語は、東方のカラフトまで伝えられ、さらにウイルタのニグマーとなったが、それを伝承する佐藤チヨさんはさらに北海道に移り、現在、釧路に住んでおられる。ウイルタ人のニグマーがサハリンで記録されているか不明であり、佐藤さんの伝承保存するニグマーは重要な価値をもつ。

佐藤さんからくりかえしくりかえし聞きながらテキストをつくる作業をおこなって、夕刻、札幌へ帰る特急にのると、ニグマーの故地から南に遠い北海道の地でそれを聞くという感慨が、あらためてわいてくる。海岸線が列車に近づいては遠のき、近づいては遠のいて行くとその車窓を眺めながら、佐藤さんもすでに70代なかば、それにわたくしも60歳をいくつかこえ、佐藤さんの伝承を記録保存するためにも、このさきニグマーのテキスト作製の作業をすすめられるだけすすめなければと思うのである。

引用文献

池上二良 [採録・訳注], 1984. 『ウイルタ口頭文芸原文集』札幌・北海道教育委員会(『ウイルタ民俗文化財緊急調査報告書 6』), 網走・網走市立中央公民館内・網走市北方民俗文化保存協会.

池上二良・谷本一之, 1974. 「オロッコ族の歌謡」 [1. オロッコ詩歌詞の韻律論的分析(池上執筆) 2. オロッコ歌謡の音楽的分析(谷本執筆)], 『北方文化研究』8, 札幌・北大文学部附属北方文化研究施設.

高倉新一郎, 1982. 「犀川会資料」札幌・北海道出版企画センター.

間宮林蔵, 1808. 「カラフト島見分仕候趣申上候書付」『松田間宮兩人カラフト見分申上書』北海道庁蔵.

Schrenck, L. v., 1881. *Reisen und Forschungen im Amur-lande*, Band III, Erste Lieferung. St. Petersburg.

Shirokogoroff, S. M., 1933. *Social Organization of the Northern Tungus*. Shanghai. 川久保悌

- 郎・田中克己訳, 1941. 『シロコゴロフ 北方ツングースの社会構成』東京・岩波書店.
- Василевич Г. М., 1936. *Материалы по эвенкийскому (тунгусскому) фольклору*, вып. 1, Сборник материалов по эвенкийскому (тунгусскому) фольклору. Ленинград.
- , 1958. *Эвенкийско-Русский словарь*. Москва.
- , 1966. *Исторический фольклор эвенков, Сказания и предания*. Москва-Ленинград.
- Воскобойников, М. Г., 1960. *Эвенкийский фольклор, Учебное пособие для педагогических училищ*. Ленинград.
- Каргер, Н. Г., 1929. *Отчет об исследовании родового состава населения бассейна р. Гарина, Гарино-амгунская экспедиция 1926 года*. Ленинград. エヌ・ゲ・カルゲル, 富田良作訳, 1944. 「サマーギル族に就いて—ガリン河流域の住民の氏族構成に関する調査報告—」, 『書香』16巻1, 2号 大連・満鉄大連図書館.
- Паткановъ, С., 1912. *Статистическія данныя, показывающія племенной составъ населенія Сибири, языкъ и роды инородцевъ*, Томъ 1. С.-Петербургъ.
- Романова, А. В., Мыреева, А. Н., 1971. *Фольклор эвенков Якутии*. Ленинград.
- Смоляк, А. В., 1966. *Ульчи, хозяйство культура и быт в прошлом и настоящем*. Москва.

[池上二良『ツングース語研究』(汲古書院 2001) 213-221 から再録：初出『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』52: 1-4 (東京外国語大学 1984)]